建築家 松ヶ崎萬長の後期の経歴と作品

—松ヶ崎萬長の経歴と作品 (そのⅡ)—

THE CAREER AND THE WORKS IN THE LATTER PERIOD WITH
ARCH. TSUMUNAGA MATSUGASAKI

—The career and the works with Tsumunaga Matsugasaki (Part II)—

岡田 義治*, 初田 亨**

Yoshiharu OKADA and Tohru HATSUDA

T.Matsugasaki, an architect retired from the special Architecture Bureau in 1888. However, he remained active for 15 years. He worked as a designer at the Architect Design Office. One of Mr Matsugasaki's important works was the Bank of 77. He also was the architect for 17 other projects one of which was the Goni Hall. He went to Taiwan in 1907 and he was employed by the Taiwan's National Railway, the Taipei and Taichu city governments as a part-time nonregular engineer and engaged in architectural design. Some of his prominent works in Taiwan include the Taiwan Railway Hotel, the Shintyu Station building and the Taipei West Gate Market which are still utilized today.

Keywords: T.Matsugasaki, Bank of 77, Goni Hall, Taiwan's National Railway, Taiwan Railway Hotel, Shintyu Station building, Taipei West Gate Market

松ヶ崎萬長, 七十七銀行, 五二会館, 台湾総督府鉄道部, 台湾鉄道ホテル, 新竹駅舎, 台北西門市場

はじめに

松ヶ崎萬長 (1858 ~ 1921) の経歴は、①誕生から禁中児の時代、②海外留学の時代、③官吏の時代、④民間で建築の設計・監督をした時代、⑤台湾で建築活動をした時代、の五つに区分することができる。この区分のうち、①から③については「建築家松ヶ崎萬長の初期の経歴と青木周蔵那須別邸—松ヶ崎萬長の経歴と作品 (そのⅠ)—」としてすでに発表した。1)

本稿は、萬長の後期 (上記区分の④と⑤) の経歴と作品について、史料と現地調査等の結果をもとに明らかにするものである。

1. 松ヶ崎萬長の後期の経歴と作品

松ヶ崎萬長の後期の経歴と作品をまとめたものが表1である。この時期の萬長の作品は、国内で18件、台湾では市区改正による商店街の設計10棟 (商店名不詳) を1件と数えて12件である。

2. 民間で建築の設計・監督をした時代

[明治21 (1888) 年 ~ 明治40 (1907) 年]

2-1 経歴

明治21 (1888) 年3月、萬長は臨時建築局四等技師 (工事部長) を依頼退職となり公職を辞したが、その年の暮れには正五位となった。翌年には造家学会の理事会で推薦され、「建築雑誌」に記載方改良ニ付、在京正員各次負担ノ項目ヲ定メ平易ノ文ヲ以テ講義体ニ

逐次連綿登載スル事」という議定によって、2) 河合浩蔵、久留正道、高山幸治郎の3名とともに「製図」の項目を担当することになった。

しかし、その小職が唯一のもので、その後5年余りにわたり、経歴欄に記録する作品もなく、明治28 (1895) 年になってやっと精進湖ホテル、長野ステーションホテルの2つの建物を完成させたに過ぎない。この5年余りの間に、明治29 (1896) 年に東京地方裁判所で罰金等の処分³⁾を受けた不祥事が起きたものと推測される。事の詳細は明らかではないが、萬長の親族の中に、萬長の社会的な信用の高さと「豪放磊落、物に拘泥せず、恬淡として」⁴⁾細々したこと無頓着な性格を巧みに悪用し、しかも萬長の名と印鑑を勝手に使用して詐欺まがいの行為をした人物が居た。身に覚えのない事件ではあっても、その不正を看過した責任を厳しく問われたものである。明治27年に華族令によって華族の礼遇が停止され、⁵⁾翌年には造家学会を除名となり、⁶⁾さらに明治29年に男爵位を返上した。⁷⁾明治30年代に入ると萬長は堰を切ったように設計・監督に意欲的に取り組み始める。まず五二会館を皮切りに、大和田銀行、常野鉄道、日本水族館、斉藤合資会社を手掛けている。(表1) 私生活にも変化があった。明治31 (1898) 年、満40歳になった萬長は妻 (トリ) を入籍し、トリの実家である東京市芝区葺手町に移

* 栃木県立小山北桜高等学校

** 工学院大学工学部建築学科 教授・工博

Oyama Hokuoh High School

Prof., Dept. of Architecture Faculty of Engineering, Kougakuin University, Dr. Eng.

り、同年長男（明長）8が、明治34年には長女（延子）が誕生した。同（1901）年5月には、後に萬長の代表作とされる七十七銀行本店の設計・監督を容易にするため仙台に転居した。その七十七銀行は翌年3月に起工し、15ヶ月余りを費やして、明治36（1903）年6月、仙台の中心地である芭蕉辻に偉容を現した。

この七十七銀行が施工されている間にも、萬長は多忙を極めた。七十七銀行頭取・遠藤敬止邸、東京銀行茅場町支店、宮城倉庫株式会社の倉庫、宮城貯蓄銀行の倉庫、会津銀行の5つの建物を設計した。この時期に二女（清子）が誕生し、翌明治37年に仙台から南葛飾郡吾嬬村に転居した。それから約3年余り、建築作品の創作に恵まれず、青木周蔵那須別邸の増築の設計が国内での最後の仕事であった。私生活でも二男（久長）の誕生が唯一のもので、この時期に台湾への想いが膨らみ、台湾での建築活動の助走が始まっていたものと思われる。

2・2 作品

この時期の作品は、表2-1に示す18件である。その主な作品の概要を次に示す。

2・2・1 五二会館

明治39（1906）年、東京市麹町区内山下町（日比谷公園付近）に建築された。2階建て、間口58間×奥行き46間の中央に、幅20間×長さ32間の中庭を設けた宏壮なものであった。

この建物は、五二共進会がわが国の美術・工芸品などの製品を展示し、外国人に紹介するとともに、産業の振興・発展を図るために計画したものである。9)

2・2・2 日本水族館

萬長が明治30（1897）年に設計を開始した、と履歴書10)に記した大阪水族館は、工事費2万円余りを投じて明治33（1900）年12月に完成した。大阪朝日新聞には、翌年1月1日から「日本水族館」として開館することを告げる広告11)が出され、開館から10日後には同紙に「水族館を観る」という詳細な記事12)が掲載された。その記事によると、建物は洋風の木造で「屹然比隣に特出していと清潔なる二層楼」と称され、大阪難波ステーション前（難波新地五番丁）の通りに面し、前部・中央部・後部の3つのブロックからなり、前部と後部が2階建てであった。1階は14の鹹水属と6つの淡水属の魚槽と観覧通路からなり、前部の2階中央には標本陳列室、その左右には来賓室と重役室が設けられていた。後部の2階は中央に多角形の水槽があり、ほかには標本が陳列されていた。地下には貯水槽を設け、屋上に据えたタンク（高さ42フィート）に蒸気の力で揚水し、各水槽に分配して、また地下に戻す循環設備が設けられていた。

わが国では、明治15（1882）年に上野動物園に観魚室が設けられ、その後単独の水族館が東京の浅草、函館、名古屋などにも新設された。その中で、この日本水族館は「規模宏壮にして秩序整然たるは大阪水族館を以て其の最とす」13)と評価された。

2・2・3 遠藤敬止邸

遠藤敬止（七十七銀行頭取）邸は、住宅と社交クラブの機能を兼ねた建築として、明治35（1902）年、仙台市東二番丁に竣工した。当時の仙台の人々は「富豪の邸宅」、「モダンで豪壮な洋館」と呼んだ。「木造3階建て、外壁は漆喰塗り、急勾配の瓦葺屋根の頂部に文字方位盤を載せ、全体はルネサンス風にまとめられていたが、

玄関の屋根は唐破風で懸魚を付けていた。室内は純洋風で暖炉を備え、敷物・壁紙など洋風趣味が横溢していた」14)この邸宅は、後に谷井文蔵（東北貯蓄銀行頭取）、浜田齒科医師が所有したが、昭和20（1945）年戦災により焼失した。

2・2・4 七十七銀行本店

萬長がこの建築のために仙台市に転居し、心血を注いだもので、彼の代表作の一つである。明治35（1902）年3月に起工し、工事費6万5千余円、延べ2万4千人を投入して翌年6月に竣工した。

写真1 昭和16年頃の七十七銀行（日本銀行蔵）

地元紙「河北新報」は、当時の技術の粋を尽くした仙台市の新名所を余すところなく紹介する大きな記事15)と本店を移転して8月1日から営業する、という広告16)を掲載した。

七十七銀行は、仙台市の芭蕉辻（大町と国分町）東北角に建ち、レンガ造で隅入りのドイツ・ルネサンス風の建築であった。建築面積150坪の総2階建て、宮城県産のスレートで葺いた急勾配のマンサード屋根で覆い、ドーマーウィンドウを配していた。隅切り部分は塔を構成し、その3層部分は八面体で半円アーチの窓を穿ち、その上部には八角錐体のドーム、さらに高いランターンと避雷針を載せ、その先端までの高さは地上から27m余りに達していた。外壁には暗褐色の化粧レンガと盛岡産の白い花崗岩を用い、特に花崗岩は窓廻りや隅石などに縁取りとして配し、「渋味のある堅実重厚な建築で、形態の変化を巧みに調和し、花崗石、褐黒煉瓦、スレート等の質と色彩の調和に意を用いた秀れた意匠」、と評され、「七十七銀行は、その向隣に在った旧藩時代の城櫓風の商店と相対し、その奇観は仙台名所として記念されるものであった」。17)

1階には営業室、庶務室、頭取室、取締役室、応接室。2階には会議室、応接室、雑務室があり、屋根裏部屋は物置として使用した。

また、仙台市では初めての本格的なコンクリート造の地下室が設けられ、金庫室や食堂・厨房として使用された。

また河北新報18)によれば、内部の仕上げは、天井に桂、松、樺、桜など木材の化粧板を用いたほか、寄木張りや漆喰塗りがあり、壁

は漆喰塗りなど比較的質素であった。床は木製梁の太鼓張りで、天井と同様の材質の化粧板が張られ、その内部にはコークスを充填して防火に備えた構造とした。また、この建物には各室の湿気防止の対策として、レンガ壁の間に空気層を設け、空気を循環させる工夫が盛り込まれていた。

写真2 旧藩時代の商店街に建つ七十七銀行（日本銀行仙台支店蔵）

この建物は、昭和4（1929）年まで七十七銀行本店として使用されたが、本店が大町4丁目に移転した後、レストラン精養軒、日本銀行仙台支店として使用され、昭和20（1945）年7月、戦災により壁体だけを残して焼失した。^{19）}

3. 台湾で建築活動をした時代

〔明治40（1907）年～大正10（1921）年〕

3・1 経歴

明治40（1907）年7月萬長は台湾に渡った。

この渡台の理由の一つに、厭世、とする説がある。確かに、華族としての礼遇の停止、情熱を傾けて自ら創立した造家学会からの除名、身に覚えのないことではあったが、自らの不注意による事件で受けた裁判所からの処分、男爵位の返上などが相次ぎ、失意のうちに過ごした時期があった。そして建築の設計や監督を続ける傍ら、これらの不始末の後始末や心の傷を癒すのに、明治30年代の末頃までの時間を要したのかも知れない。仕事が一段落したとき、過去から離れ、新天地で新たな生活をしたい、という心境になったとしても不思議はない。

しかし、萬長は妻と二男二女がいた家族にも思いを巡らす必要があった。当時の台湾は決して夢ばかりの島ではなかった。例えば、ペスト、赤痢など八種の伝染病が蔓延しており、台湾総督府の「府報」には頻繁に患者数、死亡者数が報じられるほど衛生状態は極めて悪かった。^{20）}したがって単なる厭世の心境による決心、とは考えにくい。むしろ、森井健介の「妻木さんとはだいぶ親しかったようで、台湾に行ったこともそのすすめによるようです^{21）}という指摘の方が、渡台後の萬長の活動と符合している。妻木頼黄とは、臨時建築局時代から深い関わりがあり、造家学会でも同時期に活動

し、お互いに建築に対する情熱や姿勢をよく理解しあっていた。

当時の萬長の経歴や作品欄をみても、殆ど仕事が無く、しばらく建築活動から遠ざかっていたことを示している。萬長は、過去の経歴や地位、名声にこだわることなく、存分に建築活動に打ち込みたい、と思っていた。その時の妻木のすすめは、萬長にとって大きな魅力であったに違いない。

台湾に渡った萬長は、台北郊外の大加蚋堡大稻埕に落ち着き、台湾総督府鉄道部22)の事務嘱託として、すでに着工していた台湾鉄道ホテルの技術陣に合流した。事務嘱託という職名ではあったが、実質は台湾で最初の本格的なホテルとなる建築の外観を設計するもので、建築家としては重要かつ魅力のある仕事であった。

明治41（1908）年10月台湾鉄道ホテルが竣工し、同年、台北西門市場も完成させた。翌年には府中街の市区改正により商店街を新たにするため多くの設計図が必要となり、それに応える建築家は多忙を極めた。萬長も応援を要請され、商店10棟の設計を担当した。また、林文清邸、泉時計舗、萬華公学校を設計したのもこの頃であろう。同42年、萬長は鉄道部事務嘱託を御用済みとなった。そして、2年余りの多忙な建築活動を通して得た台湾の風土に親しみを感じ、この頃すでに永住を決意したといわれる。^{23）}

そして明治44（1911）年には大稻埕公学校、花苑公立学校の設計・監督に関わり、大正元（1912）年には基隆駅舎（基隆車站）、大正2年には新竹駅舎（新竹車站）、彰化小学校を設計し、完成させた。こうして建築に熱中している間に、いつしか明治という時代に幕が引かれ、大正もすでに4年が経過していた。萬長が最初に住んだ台北庁管内の建築活動も一段落したことを契機に、翌年1月、台中庁藍興堡台中街に転居して台中庁学務課備24)となった。しかし、ここ台中では目立った仕事は無く、わずかに大正7（1918）年に台中倶楽部を改修し、台中公会堂とする工事に携わった記録を残して、台湾における建築活動の幕を閉じた。

萬長は、渡台後約10年間に渡り、表2-2に示す建築の設計・監督を意欲的にこなす活動を展開した。しかし、台湾の代表的な官庁建築を幾つか手掛けながら正職員にはならず、嘱託職員あるいは傭員に甘んじ、しかもそれぞれの部局の名簿に一切氏名を登載することもなかった。^{25）}

当時の台湾建築界は台湾縦貫鉄道の全通を間近にして、建設界は活況を呈し、総督府営繕課などに内地から建築技術者の往来も多かった。例えば営繕課には野村一郎、小野木孝治、近藤十郎、森山松之助、井手薫。鉄道部には福島克巳、陸軍には中栄徹郎、池田賢太郎らが赴任し、^{26）}台湾に百花繚乱の如く近代建築を創り上げた。その建築は当時から「日本本土の水準でつくられている」かそれらを凌ぐものと評価され、今、「日拠時代の建築」として台湾建築史に位置づけられている。^{27）}その多くの建築で台湾総督府営繕課の建築家が設計者として記録されているが、実際には松ヶ崎萬長のような建築家が設計や監督の実務を担ったのである。

例えば台湾鉄道ホテルの設計について『台湾鉄道史』は「総督府技師野村一郎及鉄道部技師福島克巳ノ設計・・・」として工事中の建物と福島克巳の顔写真を掲載している^{28）}が、尾辻國吉は「明治時代の思い出・其の一」と「同其の二」の中で「鉄道ホテルは野村技師の設計で、福島技師、渡邊萬壽也、松ヶ崎萬長、服部藍一郎の諸氏が従事され直営工事であった」。^{29）}と述べている。

また、昭和18年に井手薫など16名が出席し、台湾鉄道ホテルで開催された座談会「改隸以後における建築の変遷」では、井手薫が「このホテル（座談会が行われた台湾鉄道ホテル）は松ヶ崎さんの設計でせう」。尾辻國吉は「渡邊萬壽也と松ヶ崎さんでせう」。再び井手は「これは渡邊さんのスタイルではない。これは先生（松ヶ崎）が独逸で學んできたスタイルで日本人離れて居ります。だからこれは松ヶ崎さんが独逸式でやったと聞いて居ります。だからこれは松ヶ崎さんの設計と思っていた。普通の日本人の設計ではないのです。直輸入で少しも混じり氣がないように見へるから松ヶ崎さんらしいと思う。」30) こうした指摘は、当時の台湾の近代建築を創り上げた日本人建築家が、松ヶ崎萬長を「独逸式のスタイル」で設計できる日本人建築家として認識していたことを示している。また「松ヶ崎萬長という建築の一番の元老の人」31) という表現があることをみると、一切の記録を拒みながらも台湾建築界で特別の存在として知られ、多くの建築に携わった痕跡が伺える。

大正8（1919）年9月、萬長は二女（清子）の結婚準備のために一時帰国した。そして結婚式を終えた頃に病を得、そのまま台湾に戻ることなく大正10（1921）年2月、波乱に富んだ63年の生涯を閉じた。32) 松蔭院積長照真月居士は、今、光福寺（東京都品川区大井）に永眠している。

3・2 作品

この時期の作品は、表2-2に示す12件である。その主な作品の概要を次に示す。

3・2・1 台湾鉄道ホテル

この鉄道ホテルは、台湾の鉄道網の整備に合わせ「外人ヲ招致シ我制度文物ヲ視メシ汎ク之ヲ海外ニ紹介セシムルハ少ナクトモ本島發展ノ一助タルヲ信スルナリ果タシテ然ラハ他ノ交通機関ト相俟テ一大旅館ヲ建設シ内外人士ノ來往ニ便スルノ必要アリ」33) として計画された。台北駅からすぐ前（表町）100mの位置に、樹木が茂る約3069坪の敷地が用意され、明治40（1907）年6月21日に起工し、台湾縦貫鉄道全通式挙行のわずか4日前にあたる、明治41年10月20日、突貫工事の末に竣工した34)。27の客室をもち、「台湾では初めての宏壮で美しい欧風ホテル」として利用者

置配館旅道鐵灣臺
一之分百二千尺縮

図1 台湾鉄道ホテル 配置図・1階平面図(台湾総督府『台湾鉄道史 中巻』昭和44年)

写真3 台湾鉄道ホテル（「鉄道飯店」：李乾朗氏蔵）

の評判が頗る高いホテルとなった。

施工は台湾総督府鉄道部の直営工事であったが大倉組が請負い野村一郎（当時台湾総督府管轄課長）、福島克巳（明治40年5月同管轄課から同水道部に転出）、渡邊萬壽也、服部藍一郎と松ヶ崎萬長の5人が設計・監督に携わった。外観のデザインは萬長、内部の装飾は服部が担当した。こうしたことから、この鉄道ホテルは萬長の台湾での代表作の一つに数え挙げられてい

る。35)

階三館旅道鐵灣臺
一之分百六尺繪

階二館旅道鐵灣臺
一之分百六尺繪

図2 台湾鉄道ホテル 2・3階平面図

(台湾総督府『台湾鉄道史 中巻』明治44年4月、P.424)

石造とレンガ造を組み合わせた構造の3層で、マンサード屋根にドーマーウィンドウを配して、ルネサンス様式にまとめられていた。特に松ヶ崎萬長が好んで用いたマンサード屋根については、台湾の建築史家・李乾朗は「台湾の官庁建築の屋根に数多く用いられたマンサードスタイルは、松ヶ崎萬長が鉄道飯店（鉄道ホテル）にドイツ・マンサードを用いてから流行した」と指摘し、36) 畠山喜三郎も「マンサードの様式は内地には少ないようですが、松ヶ崎さんが台湾で先鞭をつけたのではないですか」37) と述べるほど印象的であったことが語り継がれている。

建物は西側が正面で凹型の平面をもつ3層で、中央に庭園（中庭）が配置されていた。1階は620坪余りの建築面積を有し、車寄せから玄関を抜けると広さ45坪の大広間があり、その北側には階段とエレベーター、さらに奥には談話室や喫煙室があった。また大広間の南側には酒場や玉突場があり、その奥には2つの食堂と広さ7

5坪の大食堂が設けられていた。その大食堂は3層の部分から別に張り出した単層で、約90坪の炊事場や14坪余りの冷蔵庫などを付設し、充実した設備を誇っていた。

2階は1階と同じ位置に大広間があり、玄関上部は集会室、他に11の客室があり、3階には16の客室があった。本館の小屋組は木造であったが大食堂には鉄骨が用いられた。また、内外壁や天井には白や着色された漆喰が塗られ、床は檜や杉の板張りとした上に、用途によってリノリウムや絨毯が貼られていた。

3・2・2 台北西門市場

台北西門市場八角紅樓として明治41（1908）年に竣工したもので、近藤十郎との共同設計といわれる。38) レンガ造で八角形とT字形を組み合わせた形の平面構成で、小屋組には木製洋小屋トラスを用い、市場の用途に必要な大きな梁間を確保している。

当時西門町付近一帯は台北市の繁華街に近く、日本人の娯楽街として賑わった。しかし露天商が多く、衛生環境が良くないことが指摘されていた。また清の時代には付近に墓地があったと伝えられ、建築が敬遠された場所でもあった。そこで、「中国流の風水に基づいて、その縁起から八角形を採用した設計とし、露天商を収容して街の整理と美観や衛生環境の改善を図ったものといわれている」。

39) 一時、有紅劇院として劇場や映画館の用途に使用されたが、90年の歳月を経た現在、再び市場として使用されている。

写真4 台北西門市場（李乾朗氏蔵）

3・2・3 基隆駅舎

台湾縦貫鉄道の起点である基隆駅は、顧客や物資の運搬量が年々増加し、また海陸の連絡機能の強化を図る要請があつて、その改築

写真5 基隆駅舎（洪致文氏蔵・昭和20年以降）

工事が進められ、大正元（1912）年にルネサンス・スタイルのファサードをもつ新しい基隆駅舎が竣工した。

鉄筋コンクリートと赤レンガを用いた構造で、中央部は凸型平面の2層、2階にはキーストンのある半円アーチの窓を配し、屋根はマンサード型で4面に時計を備えた時計塔が聳えていた。両翼は単層で中央部と同じマンサード型の屋根を載せ、円形の屋根窓を穿っていた。

その駅舎は第二次大戦の「度重なる空襲にも堪えて、無傷のまま戦後も美しい姿を見せていた」40)が、近年取り壊された。

3・2・4 新竹駅舎

明治41（1908）年に起工し、工事費2万2千余円を投じて大正2（1913）年3月に竣工した。レンガ造の壁体に鉄骨の小屋組を載せた構造で、現在も駅舎として使われている。昭和3（1928）年の一部増築、第二次大戦で被害を受けた部分の2度の修復工事の記録があるが、外壁、開口部、屋根、塔の形など、全体としては竣工当時の外観を保っている。

写真6 新竹駅舎（岡田義治『青木周蔵那須別邸』1995年より）

4 まとめ

本稿では萬長の作品の概要、その作品の背景となった経歴を整理して述べたが、残念ながら、萬長の内外の作品は、その殆どが失われている。しかし、わが国では青木周蔵那須別邸、台湾には新竹駅舎と台北西門市場が現存し、改修や改築を経て、今なお活用され、萬長の作品の一端を垣間見ることができる。

萬長の作品の多くは、マンサード型の屋根に個性的な屋根窓を配して、デザインを整えている。その屋根窓は、時に和風的なもの（青木周蔵那須別邸）があり、円形窓の上部に眉飾りやキーストンを付

したものの（基隆駅舎、新竹駅舎、台中公会堂）、屋根窓上部にベデイメント風の飾りを付けたもの（七十七銀行、台湾鉄道ホテル）などがある。また、建物の中央部、端部や隅部を塔状に構成する手法も多い。例えば、基隆駅舎、新竹駅舎は中央部を、大稲埕公学校では端部を、そして七十七銀行では隅部を巧みに構成して塔状の外観を創り上げ、そこにドイツ的な尖塔などを載せている。外壁や窓などの意匠も鉄道ホテルを除けば堅実で重厚なおもむきがある。特に七十七銀行や鉄道ホテルでは、ドイツ的な建築様式・意匠をちりばめて、ドイツ派建築家の存在を示しているかのようである。

こうした作品を見た当時の建築家達は、萬長が日本人として初めてベルリン工科大学で建築の高等教育を受けた経歴と、建築雑誌や履歴書で「独逸建築学士」と称した41)ことも影響してか、萬長の作品を「独逸式」と認識していた。

また、台湾では、萬長の経歴や日本における作品の実績から、元老格の建築家として評価され、慕われ、重用されたことが伺える。

かつて、臨時建築局時代に萬長の部下であり、のちにドイツ派建築家として括られる妻木頼黄、河合浩蔵、渡邊譲らは、明治の中・後期には次々と大規模なドイツ・スタイルの作品を創りあげた。しかし、妻木が逝き、渡邊も活動を停止し、やがて「神戸で設計事務所を開いていた河合（浩蔵）が一人（ドイツ派の）灯を守り、大正いっぱい活動を継続して終わった」。42) 彼らの作品に比べれば、萬長の手掛けた作品は規模も小さく、力量を十分に発揮したとは言えないが、ドイツ派最初期の建築家として萬長もまた、台湾で唯一人ドイツ建築の灯を守る気概を持ち続け、自分の納得のいく建築活動を行った、と評価できる。

5 謝 辞

本稿の最後に、萬長に関する資料のご提供と調査にご協力頂いた藤島良子氏、加藤ちえ子氏、松前孝廣・良子氏、野澤秀孝氏、七十七銀行様、日本銀行仙台支店様。また台湾での調査では、赤羽治人氏、曾賢修両氏にご協力を頂き、廖慧明氏、李乾朗氏、黃俊銘氏、など台湾の建築史家の諸先生に貴重なご教示を賜りました。さらに本研究を当初から深くご理解頂き、ご支援を頂いた日本建築学会関東支部栃木支所、日本建築士会連合会、栃木県建築士会、故柴田智男氏など、多くの方々と団体に対し心から御礼を申し上げます。

表1 松ヶ崎萬長の経歴と作品（後期）

和暦（西暦）	満年齢	事 蹟		建 築 作 品	
		月・日	凡例：〔雑〕は「建築雑誌」（数字は号数） 〔膳〕は「戸籍謄本」	竣工または設計年が 明らかな作品	左欄以外の作品 （竣工は推定）
明治21(1888)	30	3. 27	臨時建築局四等技師を依願免職となる。 12. 12 正五位となる	青木周蔵那須別邸	外務省官舎など
明治22(1889)	31	2. 28	造家学会「建築雑誌」の製図に関する担当委員となる〔雑27〕 東京市麻布区狸穴町12番地へ転居する〔雑30〕		
明治25(1892)	34	3.	東京市芝区三田小山町12番地難波方へ転居する〔雑62〕		
明治27(1894)	36	8. 7	華族の礼遇停止となる（華族令第15条）		精進湖ホテル 長野ステーションホテル
明治28(1895)	37	3. 10	造家学会を除名となる（会則第12条）〔雑99〕		
明治29(1896)	38	5. 28 10. 22	東京地方裁判所に於いて罰金等の処分を受ける 男爵位を返上する（華族令第13条）		
明治31(1898)	40	1. 21 2. 1 3. 19	東京市芝区葺手町（現・虎ノ門4丁目）25番地へ転居する〔膳〕 旧住所は本所区（現・墨田区）向島須崎176番地 妻トリ（芝区葺手町の田子悦次郎長女）を入籍する〔膳〕 長男明長が誕生する		
明治33(1900)	42			設計・大和田銀行 設計・常野鉄道 日本水族館	

明治34(1901)	43	1. 31 長女延子が誕生する [膳] 5. 七十七銀行の建築のため仙台へ転居する	設計・斉藤合資会社	
明治35(1902)	44	3. 15 七十七銀行が起工する	遠藤敬止邸／東京銀行茅場町支店 宮城倉庫(附倉庫)	
明治36(1903)	45	9. 20 二女清子が誕生する [膳]	宮城貯蓄銀行倉庫 七十七銀行	会津銀行
明治37(1904)	46	この頃南葛飾郡吾嬬村字請地村1番地に住む		
明治39(1906)	48	3. 7 二男久長が誕生する [膳]	五二会館	青木周蔵那須 別邸増築 (設計)
明治40(1907)	49	7. 台湾に渡り、台湾総督府鉄道部事務嘱託となる		
明治41(1908)	50	1. 21 三女長子が誕生する [膳]	台湾鉄道ホテル 台北西門市場	萬華公学校 林文清邸
明治42(1909)	51	10. 台湾総督府鉄道部事務嘱託を御用済となり、台湾永住を決意する	府中街市区改正で商店街 の建築設計(10棟)	泉時計舗
明治44(1911)	53		大稲埕公学校／花苑公立学校 (現・太平国民学校)	
明治45(1912)	54	5. 13 台北庁大加蚋堡大稻埕瑤瑤街へ舢舨西門外街2-20へ寄留届提出	基隆駅舎(車站)	
大正 2(1913)	55	11. 3 三女・長子が河上茂四郎(台湾軍司令部を施工した大工棟梁)の 養子となる [膳]	新竹駅舎(車站)	彰化小学校
大正 5(1916)	58	1. 19 台中庁監獄堡台中街880番地へ転居する(旧寄留地は台中庁線 東堡彰化街土名東門211番地。台中庁学務課雇いとなる [膳] 5. 30 台中庁監獄堡台中街208番地へ転居 [膳]		
大正 7(1918)	60		台中公会堂(改修)	
大正 8(1919)	61	9. 台湾より帰国する(二女・清子の結婚準備のため)		
大正10(1921)	63	2. 3 荏原郡入新井町大字新井宿1305で死去 [膳]		

【事蹟出典】：特記がない事蹟は、明治29年までは宮内省「華族歴」、明治30年以降は本人の「履歴書」(明治37年)と岡田義治『青木周蔵那須別邸－青木周蔵と松ヶ崎萬長－』1995年、日本建築学会関東支部栃木支所による。
 【作品出典】：松ヶ崎萬長『建築及設計監督上の略歴』(大正8年9月)と岡田義治『青木周蔵那須別邸－青木周蔵と松ヶ崎萬長－』1995年、日本建築学会関東支部栃木支所による。

表2-1 松ヶ崎萬長の作品(I:日本・後期)

No	作 品	起：起工年月 設：設計年月	竣 工 年	工事費 千 円	記録にある建設地名 現：現在の地名	備 考 建築主など
1	青木周蔵那須別邸	不 明	明治21. 7	不 明	現：栃木県黒磯市青木	青木周蔵 / 現存
2	外務省官舎	不 明	不 明	不 明	壺南坂上	
3	外務省顧問邸	不 明	不 明	不 明		
4	外務省秘書官住宅	不 明	不 明	不 明		
5	精進湖ホテル	不 明	明治28	不 明	現・山梨県西八代郡上九一色村	H.S. ホットウェース
6	長野ステーションホテル	不 明	不 明	不 明		
7	日本水族館	設：明治30. 3	明治33. 12	20	大阪・難波新地五番丁	太田 実 ほか
8	五二会館	設：明治31. 1	明治39. 6	220	東京市麹町区内山下町	五二共進会
9	大和田銀行	設：明治33	不 明	30		
10	常野鉄道	設：明治33. 10	不 明	4		
11	斉藤合資会社	設：明治34. 1	不 明	40		
12	遠藤敬止邸	不 明	明治35. 1	不 明	仙台市東二番丁	遠藤敬止
13	七十七銀行本店	起：明治35. 3	明治36. 6	65	仙台市大町4丁目	
14	宮城貯蓄銀行	起：明治35. 4	明治36. 6	17		
15	宮城倉庫(附倉庫)	起：明治35. 5	明治35. 12	4	仙台市東四番町	
16	東京銀行茅場町支店	設：明治35. 10	不 明	12	東京市茅場町	
17	会津銀行	設：明治36	不 明	14	現：会津若松市	
18	青木周蔵那須別邸増築	不 明	明治42. 3	不 明	現：栃木県黒磯市青木	青木周蔵 / 現存

表2-2 松ヶ崎萬長の作品(II:台湾)

No	台湾の建築作品	竣 工 年	建設地	備 考	No	左欄と同時期と 推定される作品	建設地	備 考
1	台湾鉄道ホテル	1908(明治41)	台北市	台湾鉄道飯店				
2	台北西門市場八角紅樓	1908(明治41)	台北市	現存・市場で使用				
3	府中街商店街の商店 10棟	1909(明治42)	台北市	現存する商店の中 どれが該当か不明	8 9 10	林文清邸 泉時計舗 萬華公学校	台北市 台北市 台北市	
4	大稲埕公学校	1911(明治44)	台北市	現在の太平国民小	11	花苑公立学校	台北市	
5	基隆駅舎(基隆車站)	1912(大正元)	基隆市	近年取壊された				
6	新竹駅舎(新竹車站)	1913(大正2)	新竹市	現存・駅舎で使用	12	彰化小学校	彰化市	
7	台中公会堂	1918(大正7)	台中市	台中俱樂部を改修				

注と参考文献

- 1) 岡田義治、初田亨「建築家 松ヶ崎萬長の初期の経歴と青木周蔵那須別邸—松ヶ崎萬長の経歴と作品（そのⅠ）—」日本建築学会計画系論文集、1998年12月、No.514に掲載予定（採用決定）
- 2) 造家学会『建築雑誌第27号』明治22年3月28日、P.23、分担項目は、地形・煉化・石・暖温、通風・音響、光線など11項目で、担当者は妻木頼黄、片山東熊など総勢14名であった。
- 3) 宮内省「華族歴」によれば、萬長は明治26年3月7日、本所区裁判所に於て「家資分散者と決定」され、明治29年5月28日には東京地方裁判所において「重禁錮4月15日罰金4円監視6ヶ月」に処せられた。
- 4) 森井健介、岩下秀男「本会創立者松ヶ崎萬長氏のこと」日本建築学会論文報告書号外、昭和41年10月、P.725
- 5) 宮内省「華族歴」によれば、明治27年8月7日、華族令第15条第3項により華族の礼遇を停止となった。
- 6) 造家学会『建築雑誌・第99号』明治28年3月25日に、「会則12条により除名正員 独逸建築学士 松ヶ崎萬長君」という記事がある。造家学会々則12条は「例月の会費怠納6箇月に及ぶものは理事会の議決を経て退会せしむるとあるべし」（同『建築雑誌・85号』に掲載）と定めたものである。
しかし、この時期の萬長は経済的には会費を怠納するほどの状況にはなかった。したがって、萬長は会費を故意に怠納することによって、自動的に除名される道を選んだものと思われる。
- 7) 維新史料編纂会『復刻 華族譜要』昭和57年、P.785
- 8) 松ヶ崎明長（1898～1939）は、早稲田大学を卒業して内務省に入った。その後、画家を志してフランスを目指したが、その途次台湾で「亜旗」の雅号で作家活動を行い、そのまま台湾に没している。代表作は第六回台展で特選となった「黄衣の少女」。
- 9) 日本建築学会『建築雑誌・第232号』明治39年4月25日、P.210に記載されている。
- 10) 松ヶ崎萬長「履歴書」明治37年2月、
- 11) 大阪朝日新聞、第6788号・明治33年12月29日に「明年1月1日より開館。本館は学理と経験に拠り数多の魚介を放養し其天然生活の状態を実見せしめ娯楽の間自学芸を裨補すべき博覧場なり」という広告が掲載された。
- 12) 大阪朝日新聞、第6798号・明治34年1月10日
- 13) 大阪府『大阪府誌 第三編』思文閣、明治36年4月、P.1203
- 14) 小倉強『明治の洋風建築—宮城県—』宝文堂、昭和51年、P.129
- 15) 「河北新報」第2194号・明治36年7月31日は、1064字の記事と「芭蕉の辻より望む新築の七十七銀行前景」として建物全体のスケッチを掲載した。
- 16) 七十七銀行『七十七銀行百年史』昭和54年4月、P.67に収録。
- 17) 七十七銀行『七十七銀行七十七年史』昭和31年4月に、木村一郎画伯が描いた油絵「芭蕉辻東北角時代の七十七銀行」（七十七銀行所蔵）が紹介されている。その裏面に、小倉強による七十七銀行建築の解説文がある。
- 18) 「河北新報」第2194号・明治36年7月31日
- 19) 前出、注と参考文献16）、17）による。
- 20) 台湾総督府「府報」第2180号、明治40年5月7日、P.23の衛生欄によれば、台湾全土のペスト患者（初発よりの総数）は、1175

名に達し、すでに1009名が死亡していた。

- 21) 森井健介『師と友—建築をめぐる人々—』鹿島研究所出版会、昭和42年、P.195、
- 22) 鉄道部は「台湾総督ノ管理ニ属シ鉄道ノ建設、保存、運輸及ビ私設鉄道ニ関スルコトヲ掌ル」（台湾総督府鉄道部官制・明治32年11月勅令第426号）とて、「諸建造物ノ新設保存修理改築ニ関スル事項」は工務課が担当した。（台湾総督府鉄道部分課規程・明治32年12月訓令第346号）。
- 23) 遺族の伝承による。
- 24) 台湾台中市政府に松ヶ崎萬長の戸籍（種別一、八八〇号、0027頁）が残され、戸主の職業欄には台中庁学務課傭と記されている。
- 25) 台湾総督府鉄道部「第九年報 明治四十年」をはじめ、台湾総督府「府報」、叙任及辞令欄、明治39年～大正8年。台湾総督府鉄道部『台湾鉄道史』大正4年。台湾経世新報社編『台湾大年表』緑蔭書房、1992年復刻、文武職員欄、明治40年～大正8年。などの名簿欄（職員・嘱託・傭員）に松ヶ崎萬長の名は一切記載されていない。
- 26) 黄俊銘「明治時期台湾総督府建築技師年譜」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、1993年9月、P.1506による。
- 27) 李乾朗『台湾近代建築』雄獅美術、中華民國69年12月や日本建築学会『日本近代建築総覧』1980年3月、P.415など。
- 28) 台湾総督府鉄道部『台湾鉄道史 中巻』明治44年3月、P.424
- 29) 尾辻国吉が台湾建築師会の会誌編集者の求めに応じて述べたもの。台湾建築師会『台湾建築会誌・第13号』昭和16年、P.377。
- 30) 台湾建築師会『台湾建築会誌・第16号』昭和19年、P.38
- 31) 台湾建築師会『台湾建築会誌・第16号』昭和19年、P.38
- 32) 萬長は、大正10年2月3日午後5時、荏原郡入新井町大字新井宿1305番地で生涯を閉じた。
- 33) 台湾総督府鉄道部『台湾鉄道史・中巻』明治44年3月、P.424
- 34) 台湾総督府鉄道部『台湾鉄道史・中巻』明治44年3月、P.426～P.427によれば、明治41年春の連日の降雨などで工期が遅れ、多い時には一日1200余名を動員し、昼夜兼行で完成させた。
- 35) 鉄道ホテルの設計者については、台湾総督府鉄道部『台湾鉄道史・中巻』明治44年3月25日など、松ヶ崎萬長を省いているものもあるが、注と参考文献の30）などから萬長の代表作とした。
- 36) 李乾朗『台湾近代建築』雄獅美術、中華民國69年12月、P.177
- 37) 台湾建築師会『台湾建築会誌・第16号』昭和19年、P.39。
しかし、すでに台湾でもマンサード屋根は用いられていた。例えば、野村一郎による「台湾銀行」（明治36年）など。
- 38) 李乾朗『台湾近代建築』雄獅美術、中華民國69年12月、P.59
- 39) 台湾中原大学副教授 黄俊銘氏のご教示による。
- 40) 台湾協会「台湾協会報」第525号平成10年6月15日(2)頁
- 41) 松ヶ崎萬長の除名を報じた造家学会『建築雑誌・第99号』明治28年3月25日などに、独逸建築学士と称されている。また、「履歴書」（明治37年2月）では、本人が独逸建築学士と記載した。
- 42) 藤森照信『日本の近代建築（上）—幕末・明治篇—』岩波新書、1993年、P.241

（1998年10月9日原稿受理、1998年12月8日採用決定）